

隅切瓦

4点を確認した。比較的残りの良い122は端面に対して30度の角度で焼成前に切り落とし、凸面には比較的丁寧なヘラケズリを施す。厚さは3.5cm以上の厚手のもの(122、230、625)、2cm前後のもの(428)、1.5cm前後の薄手のもの(448、513)がある。

熨斗瓦

3点を確認した。645、686は焼成前に平瓦を半裁したものであるが、426は丸瓦を半裁した可能性がある。

瓦製相輪

1点を確認した。147は窯1新段階、灰原1、3の接合資料である。弧状を呈し、相輪の九輪にあたる可能性がある。表面は剥離により不明である。裏面には布目が残り、一部にナデ、ケズリ調整が施される。布目は内側の側面にも一部回り込む。法量は幅9cm、厚さ2.4cmで、内径は24.7cmに復元される。焼成は須恵質であるが、二次焼成を受けている。

4 窯1

(1)位置と概要(表39)

窯1はF8グリッド南端付近、丘陵斜面裾部に位置する。窯2がすぐ南側にほぼ平行して位置するほか、窯1の東側には灰原1が広がっている。窯1の長軸は、丘陵斜面の傾斜に沿って西北西から東南東を向いており、焚口が斜面低位の東南東側に設定される。なお、焚口付近は須恵器窯跡群の廃絶後に造られた道1によって大きく掘削されているほか、近代以降に造られたと思われる切り通し状の林道にも浅く削平されている。

窯1は半地下天井架構式窖窯で、掘方の側面に礫を積んで側壁を構築している。古段階と新段階で規模が若干異なるが、残存長約4.2m、幅1～1.4m程度と小型である。窯本体とは別に、窯に付随するテラスが、窯の背後、斜面高所側に造られている。窯体は、地山を掘削して築いた地下部分しか残っていないが、地上部分に粘土等で天井を構築していたと考えられる。窯1は床面のかさ上げと側壁の補修が1度行われたことを確認しており、大きく2段階の変遷を辿ったことが分かった。構築時の窯を古段階、操業終了時の窯を新段階と呼ぶこととした。

窯1からは2,604点の須恵器片、58点の瓦片が出土している(表39)。このうち、約1,500点は窯廃絶後の埋め戻し土や流入土、表土などから出土したもので、窯1に確実に伴うと判断できないものが多い。それを除くと、古段階に伴う須恵器や瓦が約300点、新段階に伴う須恵器や瓦が約700点となり、合計1,000点ほどが窯1本来の埋土に伴って出土したものである。

窯1古段階・新段階出土の須恵器は、杯類が主体となり、次いで皿類が多い。杯皿類の合計が887点となり、9割近くを小型品が占めている。その他の器種でまとまった量が出土したのは、壺類の体部片が74点、甕片が28点であるが、これらも破片数としては非常に少ない。埋土出土の遺物が生産品を概ね反映しているとするれば、窯1は杯皿類を中心に焼成していた可能性が高い。

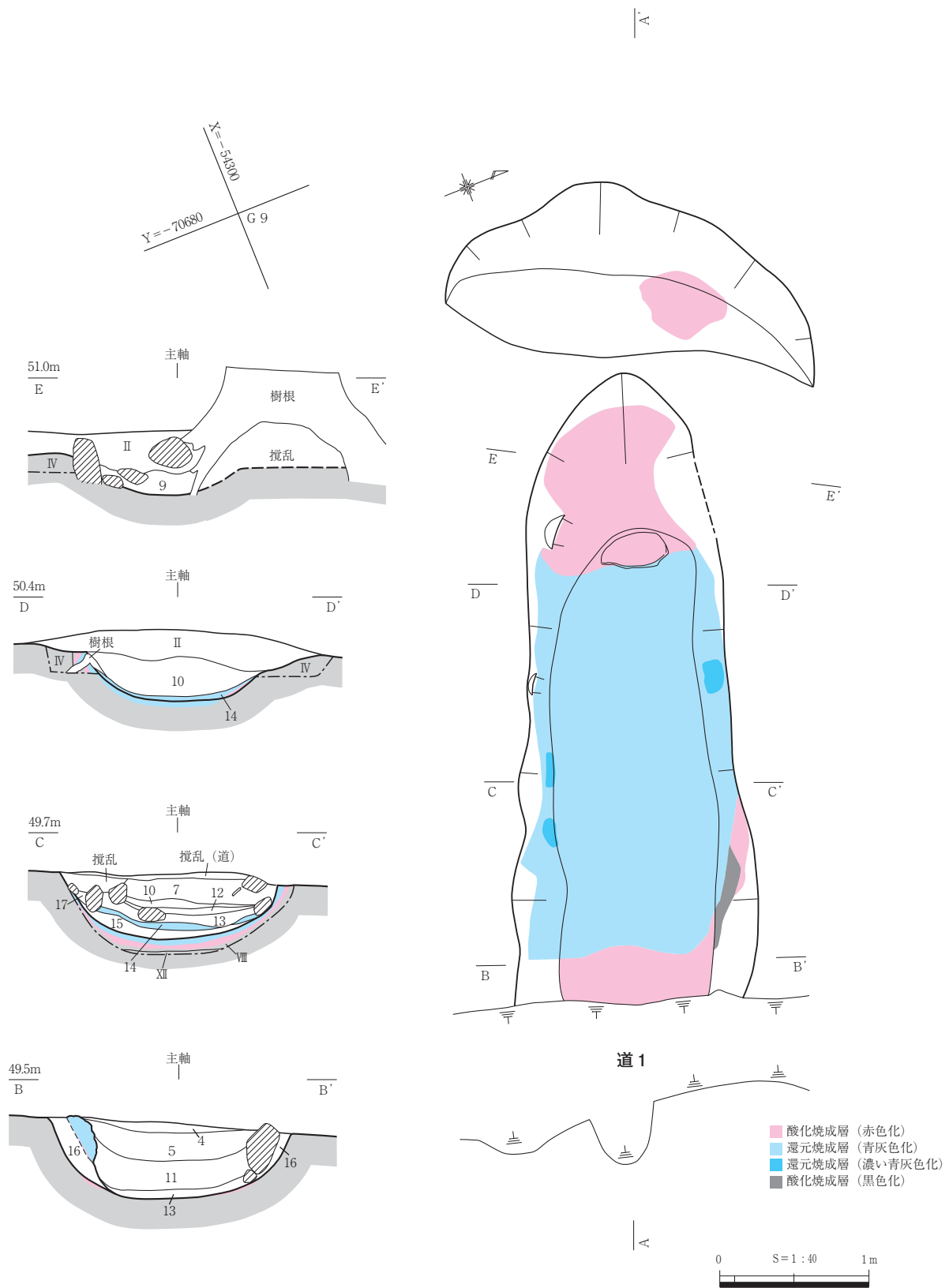
(2)掘方と土層の堆積状況(第79・80図、PL11・12・21)

窯1は半地下式窖窯のため地下部分は地山掘削によって構築しているが、側壁に礫を積み上げていることから、窯の機能時の平面形と地下に掘削された掘方の平面形が異なっている。掘方平面は歪な

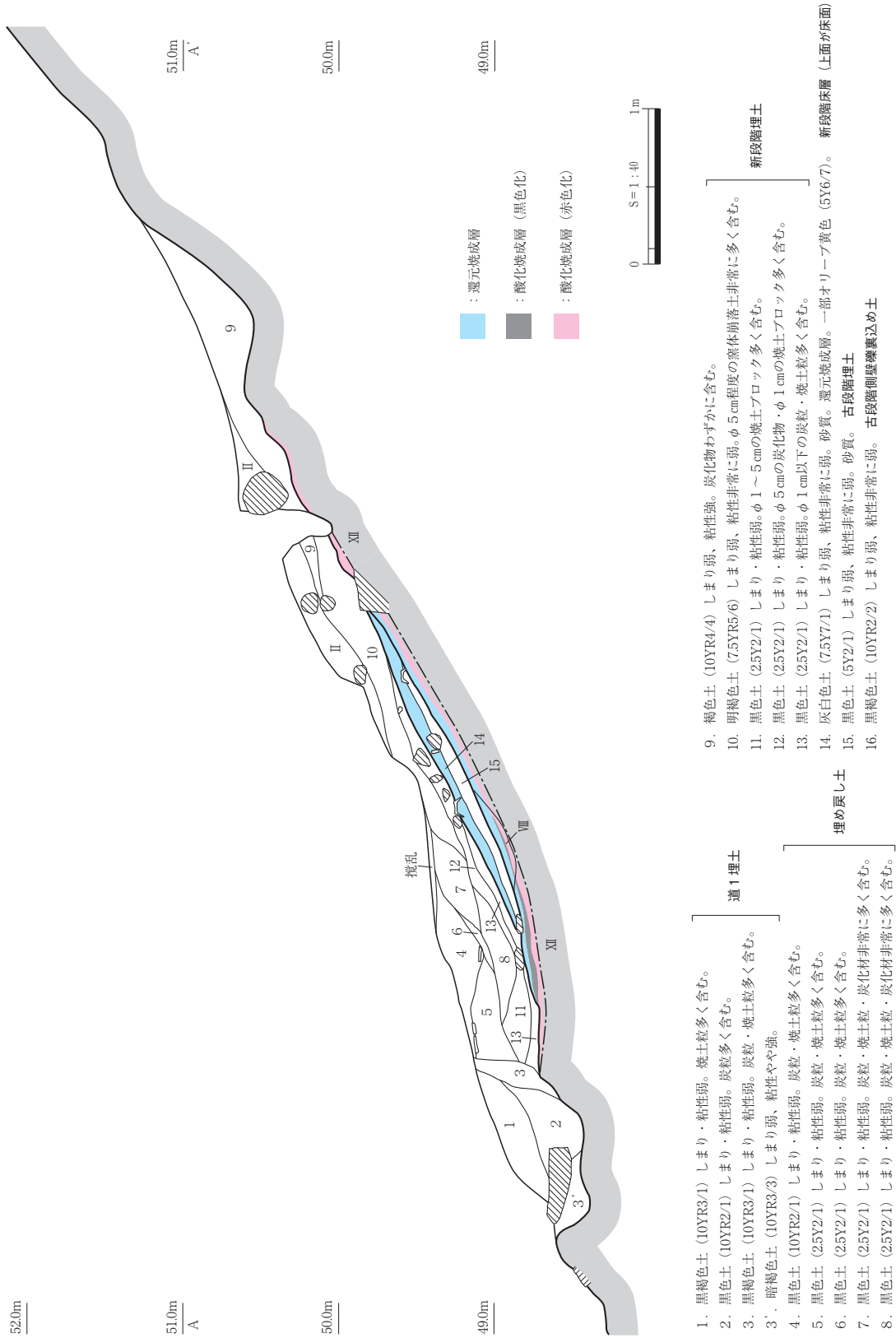
表39 窯1出土須恵器・瓦の器種組成

層位名	地区	器種 (下段数字は分類番号)																				合計		
		高台杯			杯	杯類	杯皿類		皿		高台皿	碗	蓋	壺	短頸壺	小壺	瓶類	甕	甕or瓶	焼台	不明		平瓦	道具瓦
		1	2	3			4	6	8	5														
古床直	2区																			1			1	
	3・4区						1														1		2	
	3区																1			3			4	
古床内	2区					1	4													1			6	
	2・3区					5	1										3			1	6		16	
古段階埋土	2区			1	4	18	23		6														52	
	2・3区				1																		1	
	3区	1		6	30	126	25	9	26				9	1		1	1					4	1	240
	4区				1		1																	2
地区不明								2															2	
古段階側壁	-				2	1											1						4	
古段階側壁 裏込め	-					5							1				2					2	10	
新床直	1区					1																	1	
	2区	1			3	10	1		1						1	1	3			2		4	27	
	2・3区	1			1	11	15	1	2				2										33	
	3区	1			9	17	10	5	9				15					1				1	1	69
	4区																1							1
	5区				1																			1
新段階埋土	1区												1										1	
	1・2区	1		1	4	36	7	1	6								3					2	61	
	2区				17	32	50	2	9								5	2				6	126	
	2・3区		1	2						1			1										5	
	3区	6		1	18	80	87	4	15				28				2	1	1	2	9		254	
	3・4区			1	4		9	3	4				3				4					1	29	
	3~5区			1		2	14	1	2				7										27	
	4区	1				1	1		1				1				1						6	
	5区	3			12	10	24	1	2				1				1					2	56	
	4・5区												1										1	
地区不明								1														1		
新段階側壁	-				1				1													1	3	
新段階側壁内	3区				2	2	1																5	
新段階側壁 裏込め	-				1																		1	
不明	-				1	5											1						7	
表土	1区	3		3	17	7	214	3	5			1	10			1	27				1		292	
流土	-			1	6	8	32	3				1					1					3	55	
攪乱	3区						2																2	
埋め戻し	-	7		15	140	279	643	20	64			2	35			4	28					21	1258	
合計		25	1	32	275	657	1165	56	153	1	1	3	118	1	1	8	85	3	9	10	56	2	2662	

窯段階	器種 (下段数字は分類番号)																				合計		
	高台杯			杯	杯類	杯皿類		皿		高台皿	碗	蓋	壺	短頸壺	小壺	瓶類	甕	甕or瓶	焼台	不明		平瓦	道具瓦
	1	2	3			4	6	8	5														
古段階埋土合計	1	0	7	36	150	55	11	32	0	0	0	9	1	0	1	5	0	6	7	4	1	326	
古段階側壁合計	0	0	0	2	6	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	2	0	14	
新段階埋土合計	14	1	6	69	200	218	19	51	1	1	0	62	0	1	2	20	3	3	2	25	1	699	
新段階側壁合計	0	0	0	4	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	9	



第79図 窠 1 完掘平面図・短軸土層断面図



1. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱、粘性弱。焼土粒多く含む。
 2. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱、粘性弱。炭粒多く含む。
 3. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱、粘性弱。炭粒・焼土粒多く含む。
 3'. 暗褐色土 (10YR3/3) しまり弱、粘性やや強。
 4. 黒色土 (10YR2/1) しまり弱、粘性弱。炭粒・焼土粒多く含む。
 5. 黒色土 (25Y2/1) しまり弱、粘性弱。炭粒・焼土粒多く含む。
 6. 黒色土 (25Y2/1) しまり弱、粘性弱。炭粒・焼土粒多く含む。
 7. 黒色土 (25Y2/1) しまり弱、粘性弱。炭粒・焼土粒・炭化材非常に多く含む。
 8. 黒色土 (25Y2/1) しまり弱、粘性弱。炭粒・焼土粒・炭化材非常に多く含む。
- 遺1埋土**
9. 褐色土 (10YR4/4) しまり弱、粘性強。炭化物わずかに含む。
 10. 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり弱、粘性非常に弱。φ5cm程度の窯体崩落土非常に多く含む。
 11. 黒色土 (25Y2/1) しまり弱、粘性弱。φ1-5cmの焼土ブロック多く含む。
 12. 黒色土 (25Y2/1) しまり弱、粘性弱。φ5cmの炭化物・φ1cmの焼土ブロック多く含む。
 13. 黒色土 (25Y2/1) しまり弱、粘性弱。φ1cm以下の炭粒・焼土粒多く含む。
 14. 灰白色土 (7.5Y7/1) しまり弱、粘性非常に弱。砂質。還元焼成層。一部オリープ黄色 (5Y6/7)。新段階床層 (上面が床面)
 15. 黒色土 (5Y2/1) しまり弱、粘性非常に弱。砂質。古段階埋土
 16. 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱、粘性非常に弱。古段階側壁礫裏込め土
- 埋め戻し土**
- 新段階埋土

第80図 窯1主軸土層断面図

第5章 古代以降の調査

長楕円形で、残存長4.2m、最大幅1.6m、地表からの深さ最大0.6mを測る。窯尻背後のテラスは、平面半円形で、南北幅2.5m、東西長1.2m、深さ最大0.4mを測る。このテラスは、作業用の足場であった可能性や、雨水を逃がすための溝であった可能性などが考えられる。

窯内部の堆積土は下層から、古段階埋土(15層)、新段階床層(14層)、新段階埋土(11～13層)、流入土(9・10層)、埋め戻し土(4～8層)の5つに分けられる。いずれの層からも、多くの遺物が出土している。

古段階埋土の15層は、炭化物を多く含む黒色土で、古段階の焼成時に生成した土層と考えられる。14層が新段階の床層で、還元焼成した灰白色土である。この上面が新段階床面である。この層は地山土を用いた貼床なのか、あるいは、15層のような焼成に伴う堆積土をそのまま床としたものなのか、還元焼成による土質変化が大きく、いずれとも判断がつかなかった。ただし、窯2の新段階床面形成のようすからは、後者の可能性が高いと考える。14・15層からはとくに多くの須恵器が出土しており、これらを合わせて古段階埋土出土遺物としている。

新段階の埋土はいずれも炭化物を多く含む黒色土で、新段階の焼成に伴って生成したものである。流入土はⅡ層類似の褐色土で、斜面上方からの流土によって形成された層である。窯が廃絶した後に堆積したものと考えられる。窯本体の窯尻付近(4・5区)とテラスでは、床面まで流入土のみが堆積していた。なお、遺物集計表では流入土出土遺物は新段階埋土に加算している。

最も上層にあるのが、2区を中心に堆積する埋め戻し土で、遺物を極めて多く含む黒色土層によって構成されている。これらは流入土の上に堆積する点や、土層の堆積状況及び土質から、窯の廃絶後期間を置いてから、焚口付近の堆積土や灰原堆積土などを用いて、人為的に窯を埋め戻した層と判断した。窯を埋め戻した理由は、道1を造る際に、掘削に先立って埋没しきっていない窯を埋めた可能性などが一応考えられるものの、調査ではこれを明らかにする知見を得ることができなかった。

窯の掘方下面の地山は、落ち込みに堆積したと見られるAT火山灰層(Ⅷ層)が一部にみられたが、大部分は風化土壌化した溝口凝灰角礫岩層(Ⅻ層)であった。これらの地山の表面は広い範囲で還元焼成によって青灰色に変化しており、これを断ち割ると、上から順に、青灰色の還元焼成層、黒色の還元から酸化焼成層、赤色の酸化焼成層が確認できた。

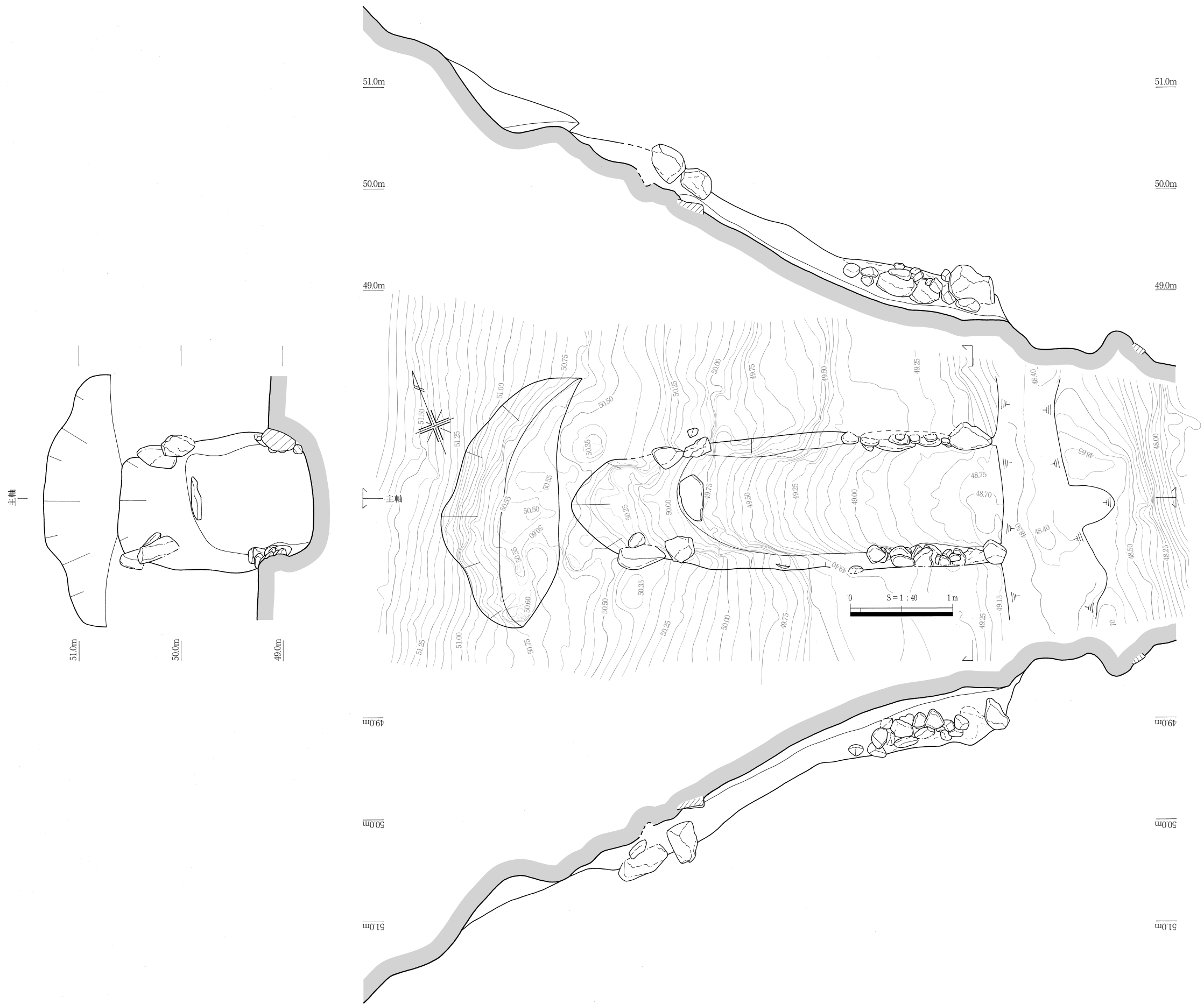
(3) 窯1 古段階(第81～85図、PL18～20)

窯の構造(第81図)

窯1 古段階は、残存長4.2m、最大幅1.4mを測る。焚口側が道1に破壊されているため、本来の長さは分からない。ただし、焚口は道1掘削範囲内に収まっていたとみられるので、大きく見積もっても最大長は5mを超えないと推定できる。平面形は概ね細長い楕円形だが、燃焼部から焼成部にかけては南北の側壁がほぼ平行し、窯尻のみが丸くなっている。

窯は燃焼部より奥側が残っていると考えられる。窯の縦断面をみると、標高48.8m付近を境に傾斜がきつくなっていることが分かる。この傾斜変換点から東が燃焼部、西が焼成部と推定している。窯の調査区名では、1区が焚口(道1によって破壊)から燃焼部にかけて、2区が燃焼部から焼成部にかけて、3～5区が焼成部となる。焼成部3区での傾斜角度が約25°である。

窯の側壁上半や天井部は全く遺存していなかったため、遺構検出面より上部の窯の形態や構造は不明である。ただし、地形と掘方の形態からは、天井架構式と考えるのが自然である。実際に古段階埋



第81図 窯1古段階遺構図

土からは、天井部または側壁の窯体の破片と考えられる小型の焼成粘土塊が少量出土しているので、構築天井が用いられていたと考えて間違いないだろう。窯体片には還元焼成したものと酸化焼成したものの両者がみられるが、前者の方が比較的大きく、量もやや多い。窯体片には周辺地山で見られるクサレ礫やデイスイト小礫が含まれているほか、イネ科植物の茎や籾殻と思われる圧痕(いわゆるスサ)が多く観察できる。周辺で採取した粘土に混和剤を混ぜて窯体を構築していたものと考えられる。なお、窯2では構築筋材とみられる植物圧痕が残る窯体片が出土しているので、窯1でも筋材が使用されていた可能性が高い。

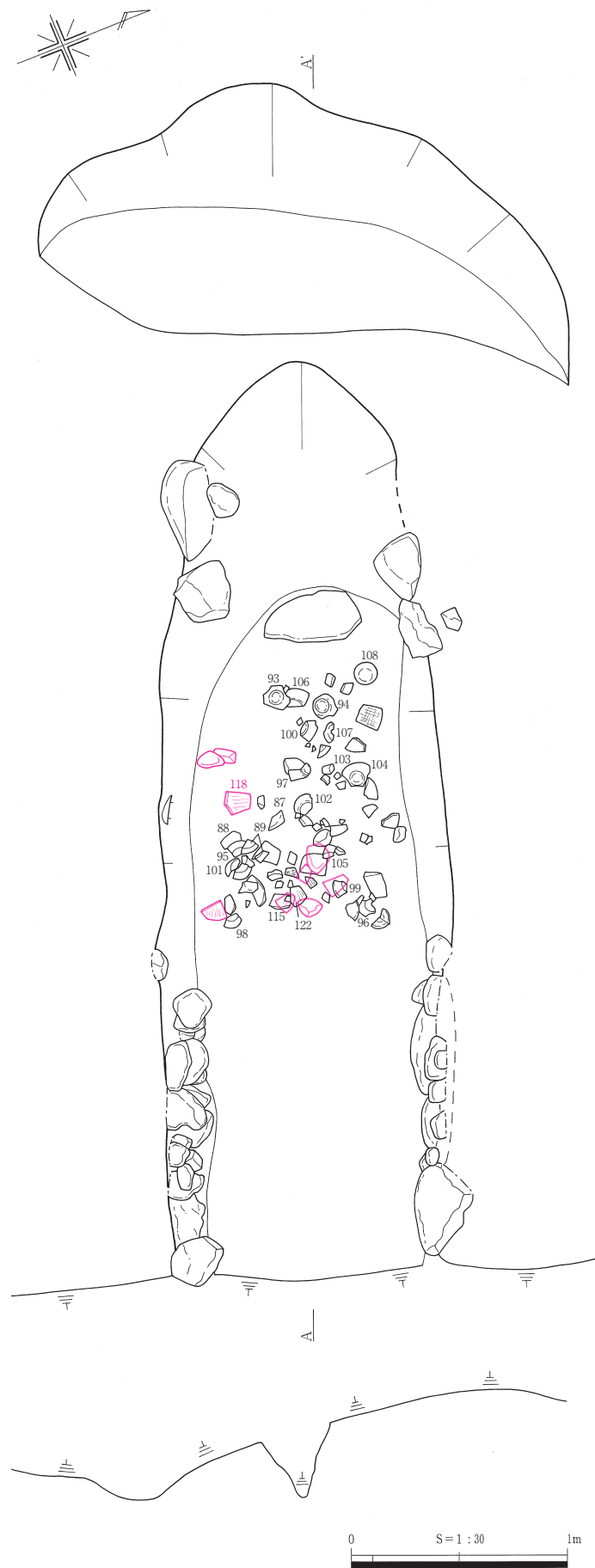
窯の側面には礫積みの側壁が構築されている。古段階で礫積みの側壁が検出できた範囲は、窯のほぼ東半分に限られている。ただし、礫のない壁面にも礫を据え付けていたと思われる窪みが確認できるほか、掘方側面に被熱していない部分や、付近の床に比べて焼成が弱い部分が多く見られたため、礫を検出していない範囲にも本来は礫積みの側壁が構築されていた可能性がある。礫が見られないのは、操業中に転落したか、新段階の修築時に古段階の側壁が取り外されたためと考えられる。ただし、側壁全面にわたって密に礫が積まれていたかどうかは確かではない。

壁面の礫には、概ね約20～50cmの亜角礫・亜円礫が用いられている。礫の積み方は、粗雑で構造的に脆弱である。全く構造的に組み合わせられていないというわけではないが、例えば古墳の石室のように礫同士が密に支持し合う堅固な構造ではなく、むしろ壁に貼り付けていると表現した方が適切な箇所が多い。礫の裏や間には若干の込め土が見られる。こうした込め土が焼成固化することで、構造的に安定したのであろう。これらの礫の石材はすべて安山岩で、その大半が大型白色の斑晶(カリ長石)が多く観察できる、粒度の高い結晶質を呈している。こうした特徴の結晶質安山岩は溝口凝灰角礫岩層に多く含まれており、遺跡内でも多く見られる。なお、燃焼部(2区)側壁の礫は、ほとんどが還元焼成によって、色調が暗灰色に変化し、表面や斑晶が溶けている。これに対して、窯尻付近(4区)側壁礫は酸化焼成によって僅かに赤化するものもあるが、肉眼では変質が確認できないものが多い。

遺物の出土状況(第82・83図)

遺物は3区の床面直上で多く出土している。古段階の埋土が2区西半部以西にしか堆積していないので、床面直上遺物も窯の西半分に偏っていると考えられる。これらの遺物は窯詰めの状況が復元できるような出土状況はないが、窯出し後に残された遺物が多少移動した程度で、ある程度の原位置を保つと考えられる。これらの遺物には、須恵器転用焼台に分類した甕片が6点含まれている。また、焼台の分類基準を満たさなかったため、焼台としなかった杯や皿も底部を上にして出土したものが多かったほか、なかには傾斜した床面に伏せ置いた際に底面が水平になるように口縁から体部にかけてを斜めに打ち欠いた資料が含まれているなど、実際には焼台として用いられていたものが中心だった可能性がある。このように、床面直上遺物には、最終操業後に残置された焼台が多く含まれる可能性が高いと考える。また、埋土出土の遺物も3区に集中しており、焼成部に残置されたものが主体と考えられる。

その他に、古段階の側壁裏込めや側壁中からも少量ながら須恵器片と瓦片が出土している。これらは基本的に窯1古段階に先行する焼成品と推測できる。ただし、窯1古段階の操業が複数回あった場合、古段階側壁の部分補修が行われたとも考えられるので、窯1古段階の焼成品が裏込めや側壁に埋め込まれた可能性もありえよう。いずれにしても、これらの須恵器や瓦は、少なくとも古段階の最終操業に先行する資料といえる。また、新段階の側壁裏込めや側壁中からも、須恵器片や瓦片が出土し



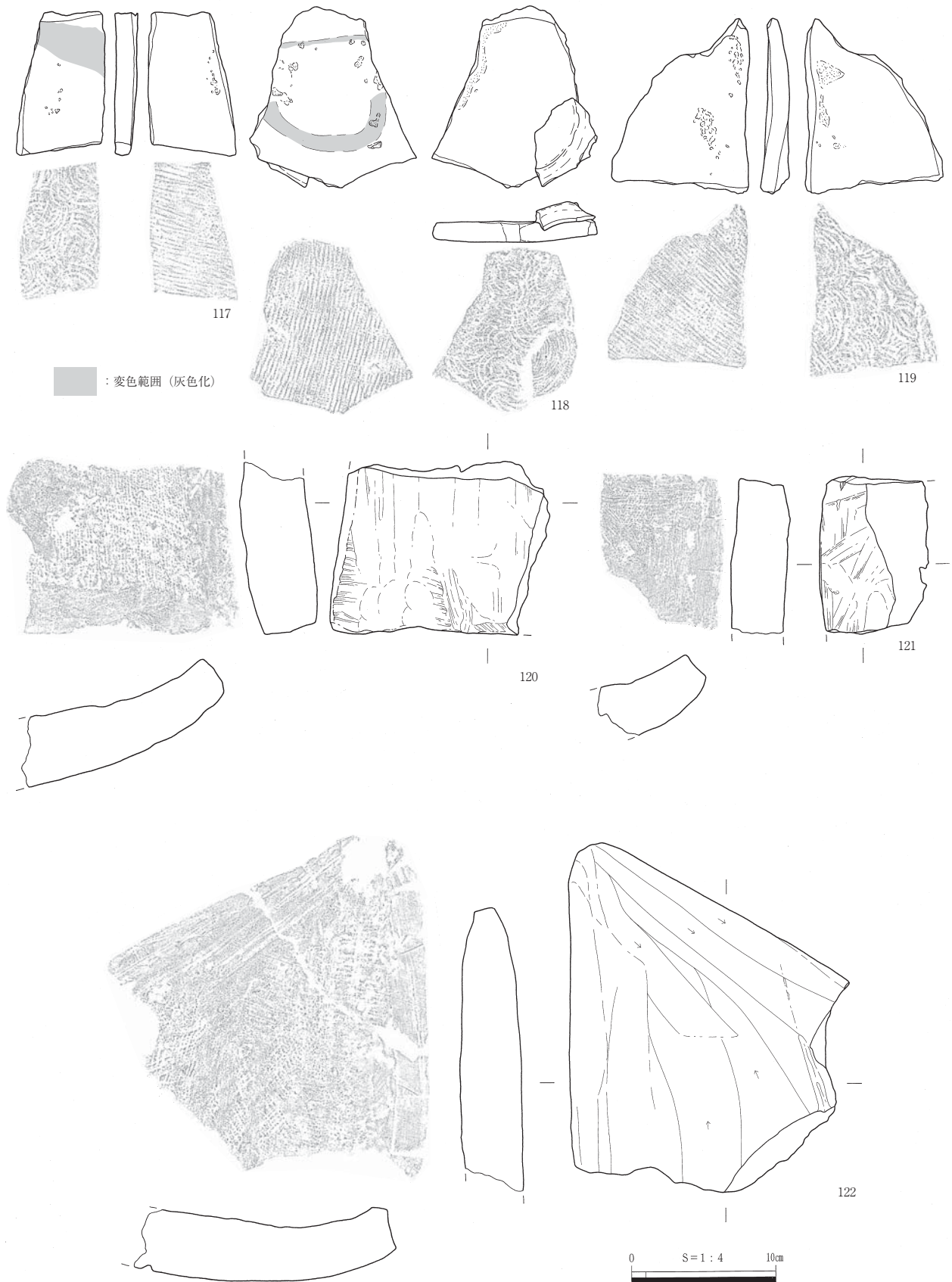
第82図 窠1 古段階遺物出土状況図(平面分布)



第83図 窯1古段階遺物出土状況図(垂直分布)



第84図 窯1古段階出土須恵器(1)



120：古段階側壁裏込め
 122：古段階埋土
 121：新段階側壁中

第85図 窯1古段階出土須恵器(2)・瓦

第5章 古代以降の調査

ている。基本的に新段階に先行する焼成品と考えられるので、古段階遺物に帰属させているが、古段階側壁出土遺物と同様、窯1新段階の焼成品が含まれる可能性も否定できない。

出土遺物(第84・85図、PL73-1・74~77-1・110-2)

先述のように、床面直上出土遺物には焼台として転用されたものが含まれると考えられるので、須恵器自体が焼成された際の同時性は保証されない。例えば、窯1に先行する窯で焼かれた製品を灰原から集めて焼台に使った可能性も十分に考えられる。したがって、これらの遺物は、窯1古段階最終操業時の焼成品として一括性はあまり高くないといえる。

86~108が窯1古段階の主体となる杯類である。91は古段階の側壁中、92は窯1新段階側壁裏込めからの出土で、窯1新段階構築前に焼成された可能性が高い。そのほかはすべて15層(床面直上層)からの出土である。86~90は高台杯である。86・87が大型のもので、86には突帯が付く。91~108は杯である。若干の大きさの違いや形態差が見られる。全般に、窯1古段階出土の杯は径が小さく、器高が低い傾向にある。なお、108は二次焼成を受けたと判断できず、焼台に分類していないが、体部を意図的に打ち欠いた可能性が高く、底部を上にして出土している。よって、焼台であった可能性が考えられる。

109~114は皿、115は広口の短頸壺、116は壺の底部である。116は古段階側壁の裏込めからの出土で、窯1古段階構築以前に焼成されたものと考えられる。117~119が転用焼台で、いずれも甕片を利用している。

須恵器以外に瓦も出土している。120・121は平瓦、122は隅切瓦である。120は古段階側壁の裏込めから出土しており、少なくとも窯1古段階の最終操業以前には焼成されていたものである。121は新段階側壁に用いられており、同じく窯1新段階の最終操業以前には焼成されていたものである。122は15層から出土している。最大厚が4.4cmと厚く、凸面調整に比較的丁寧なヘラケズリが施されている。

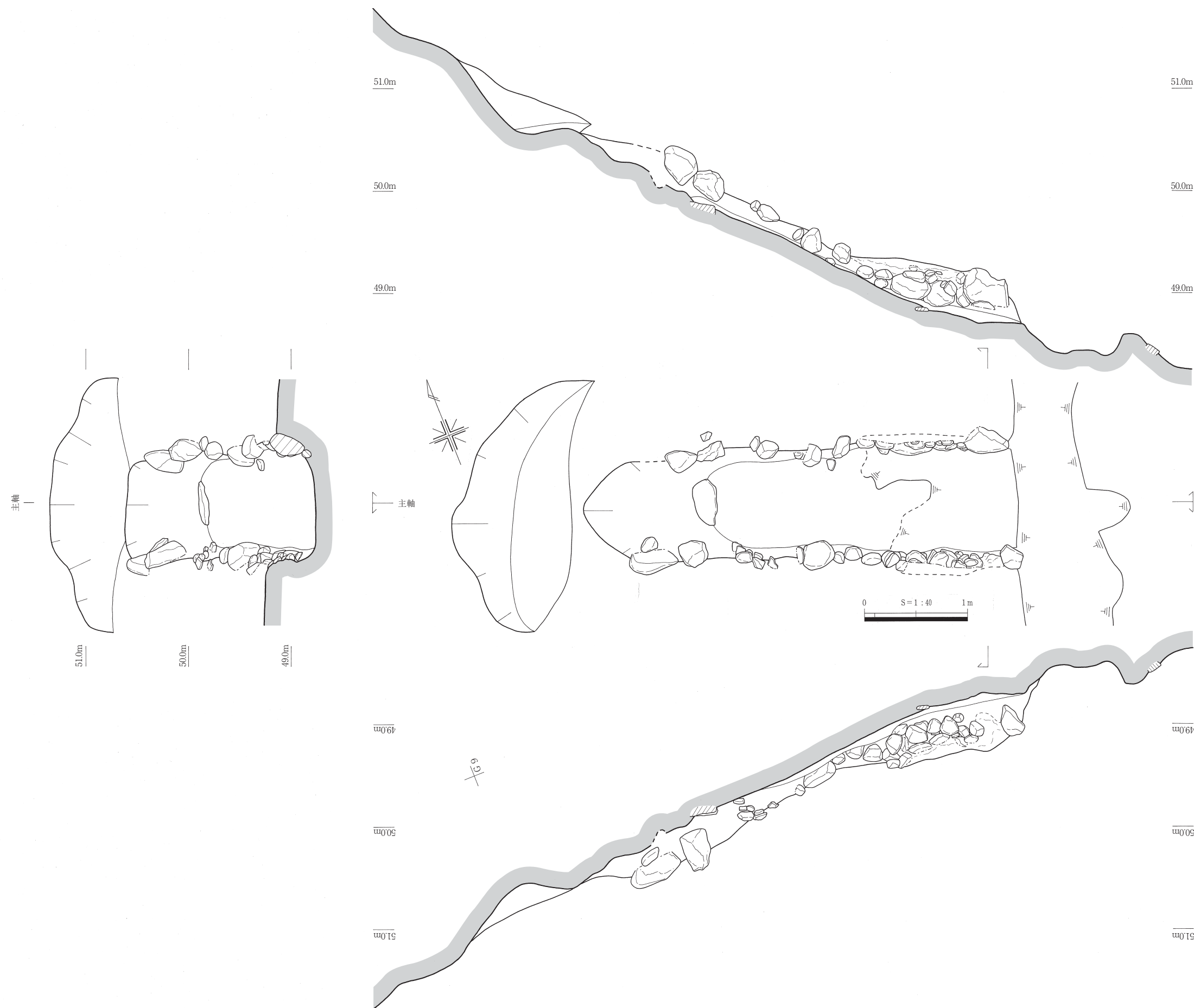
(4) 窯1新段階(第86~90図、PL14~17)

窯の構造(第86図)

窯1新段階は、古段階よりも幅が一回り狭く、残存長4.2m、最大幅1.0mを測る。平面形は古段階と概ね同じである。新段階の窯は、古段階の側壁の内側に新たに礫や粘土を貼って壁を修築し、床を僅かにかさ上げして造られている。側壁の修築は、窯尻から東1.4mまでの範囲を除く大部分で行われている。窯尻付近は古段階側壁をそのまま継続利用したと考えられる。面積は、礫の積み直しよりも、粘土の貼り付けによる修築範囲の方が広い。この修築によって、古段階よりも20cmほど内法が縮小している。

窯の燃焼部、焼成部の境は、古段階と変化ないと考えられる。床面は燃焼部以東が掻き出されて失われているが、焼成部は良く残っている。焼成部の傾斜は、かさ上げによって古段階よりもきつくなっており、焼成部3区での傾斜角度が約28°である。

新段階も架構式天井が構築されていたと考えられる。新段階埋土中からは、古段階埋土中にも見られた窯体片と考えられる焼成粘土塊が大量に出土している。ただし、窯体片はすべて拳大以下で、これらから地上部の形状を推定するのは難しい。窯体片には還元焼成したものと酸化焼成したものの両者が見られるが、前者の方が比較的大きく残りが良い。大型の窯体片のなかには、還元焼成から酸化焼成に漸移的に焼成状態が変化しているものもある。その断面は、還元焼成部分の厚さが2~3cm程



第86図 窯1新段階遺構図

度とさほど厚くなく、大部分が赤色ないしは黄色の酸化焼成を呈している。還元焼成の側が窯体壁面（窯内側）にあたると思われる。また、こうした大型で還元焼成を呈する窯体片のなかには窯体の内壁面が残っているものが含まれている。その表面には強い指ナデの痕跡が認められるので、よく湿った粘土をなでつけて窯体を構築していると推測できる。古段階出土のものと同じく、窯体片には地山礫やいわゆるスサが多く含まれている。

新段階も窯の側面には礫積みの側壁が構築されている。新段階では、一部礫が抜ける部分があるが、窯のほぼ全体にわたって礫積み側壁が確認できた。なお、礫積み側壁が検出できなかった部分では、礫が据えられていたと分かる明瞭な痕跡を確認していないものの、新段階埋土から側壁に使用されていたとみられる礫が数点出土したことから、側壁の全体に礫積みが施されていたと考える。なお、窯尻付近の礫は、古段階から継続して使用されたものと判断した。

壁面の礫には、古段階と同じく、概ね約20～50cmの垂角礫や垂円礫が用いられている。また、2点のみながら、瓦片もこうした礫に混ぜて側壁材に使われている。側壁礫のなかには、古段階から継続して使用されているものも少なくない。礫の石材は、古段階と同じく、粒度の高い結晶質の安山岩である。また、これらの礫の多くは、古段階同様、焼成によって色調が暗灰色に変化し、表面や斑晶が溶けている。礫の積み方は古段階と同じく粗雑で、礫の裏や間には込め土が見られる。込め土は古段階よりも多く用いられており、礫が粘土に埋め込まれている部分もある。粘土は還元ないしは酸化焼成によって固化しており、窯壁として安定している。また、燃焼部から焼成部東側にかけて(1・2区)の側壁礫は、ほとんどが還元焼成によって色調が暗灰色に変化し、表面や斑晶が溶けている。これに対して、焼成部西側から窯尻付近にかけて(3・4区)の側壁礫は酸化焼成によって赤化しているほか、明瞭な変質がないものも多くみられる。

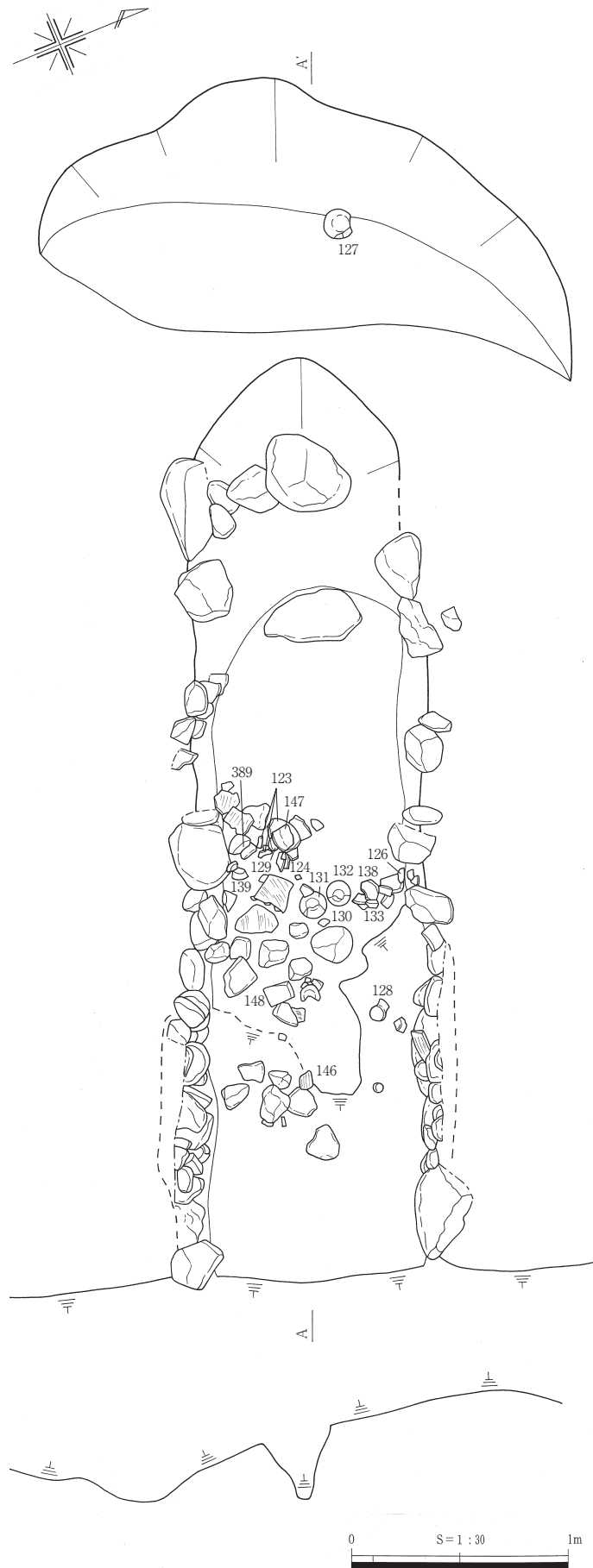
遺物の出土状況(第87・88図、PL16)

遺物は、古段階より少ないものの、床面直上である程度まとまって出土している。それらは3区に集中するが、整った配置はとらないため、窯詰めの状態は残していないと考えられる。新段階床面直上の遺物は、窯出し時の移動だけでなく、遺構埋没過程での移動も大きいと推定できるので、古段階よりも原位置性が低いと考える。古段階同様、杯・皿に底部を上にして出土したものがみられることから、床面直上遺物の多くは窯出し後に残置された焼台であった可能性が考えられるが、原位置性の低さを勘案すると、古段階ほどその蓋然性は高くないだろう。埋土出土遺物も焼成部にあたる3区で最も多く出土している。

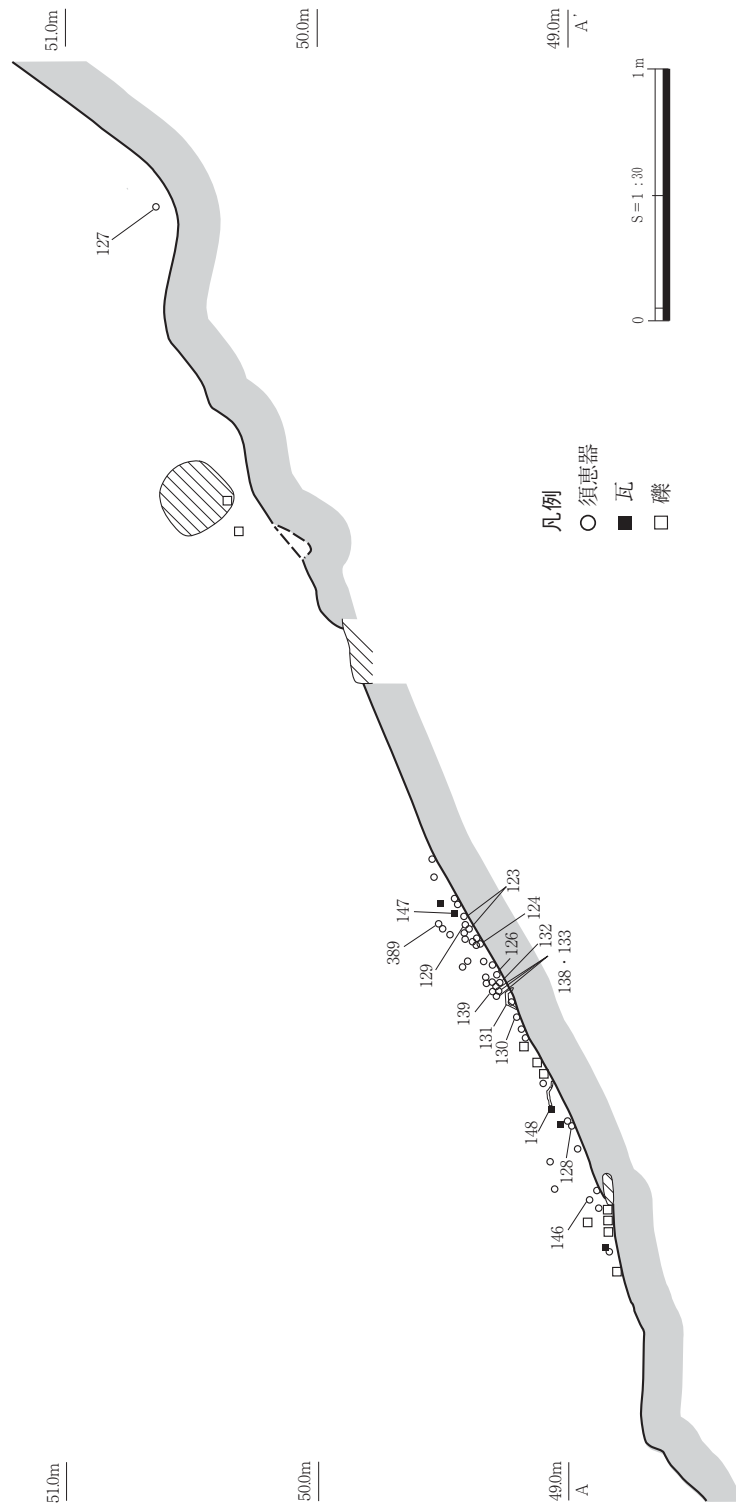
新段階出土遺物(第89・90図、PL73-1・74・75・77-2~78-1・110-2)

123・124が突帯付高台杯である。123はこの器種の特徴が分かる唯一の完形品である。突帯付高台杯は高台杯よりもかなり径が大きく、器高も高い。125～137が杯である。サイズ・形態の個体差が古段階よりも大きい。このうち、125は新段階側壁壁面に立て掛けられていたもので、完全な還元焼成になっており表面に溶解やハジケが生じている。138～144は皿である。145は碗で、本遺跡では1点のみ出土した器種である。146は甕片を転用した焼台である。

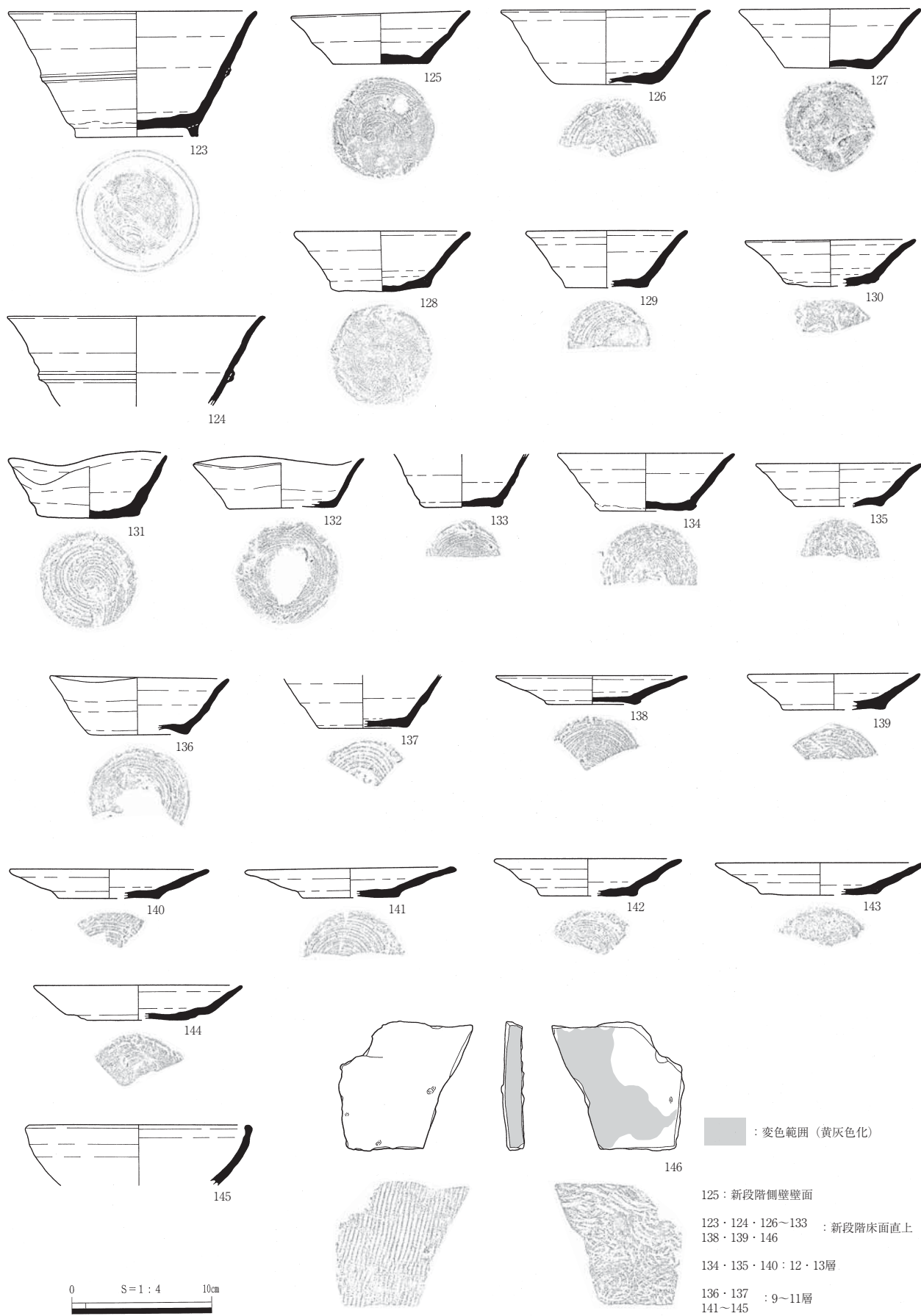
147は瓦製品で、相輪の九輪にあたる可能性がある。焼成は須恵質で、床面直上から出土した破片と、灰原1・3から出土した破片が接合していることから、窯内には焼台として持ち込まれた可能性がある。幅は9cmで、内径は25cm前後に復元される。表面は全面に剥離しており、突帯等の有無は明らかではない。裏面は細布目をナデ消しており、下端部は面取り状にケズリが施されているが、その意図



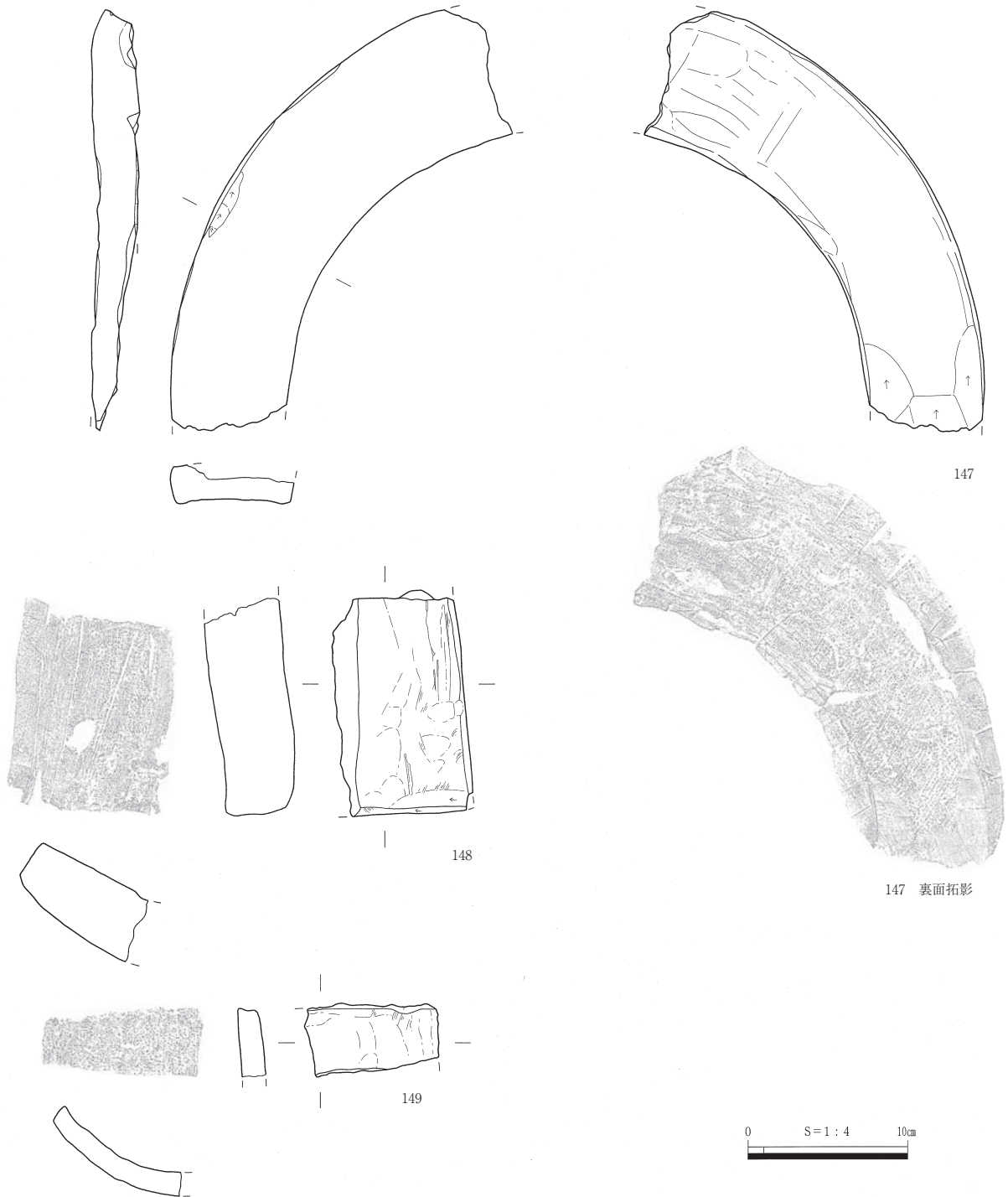
第87図 窠1 新段階遺物出土状況図(平面分布)



第88図 窯1新段階遺物出土状況図(垂直分布)



第89図 窰1 新段階出土須恵器

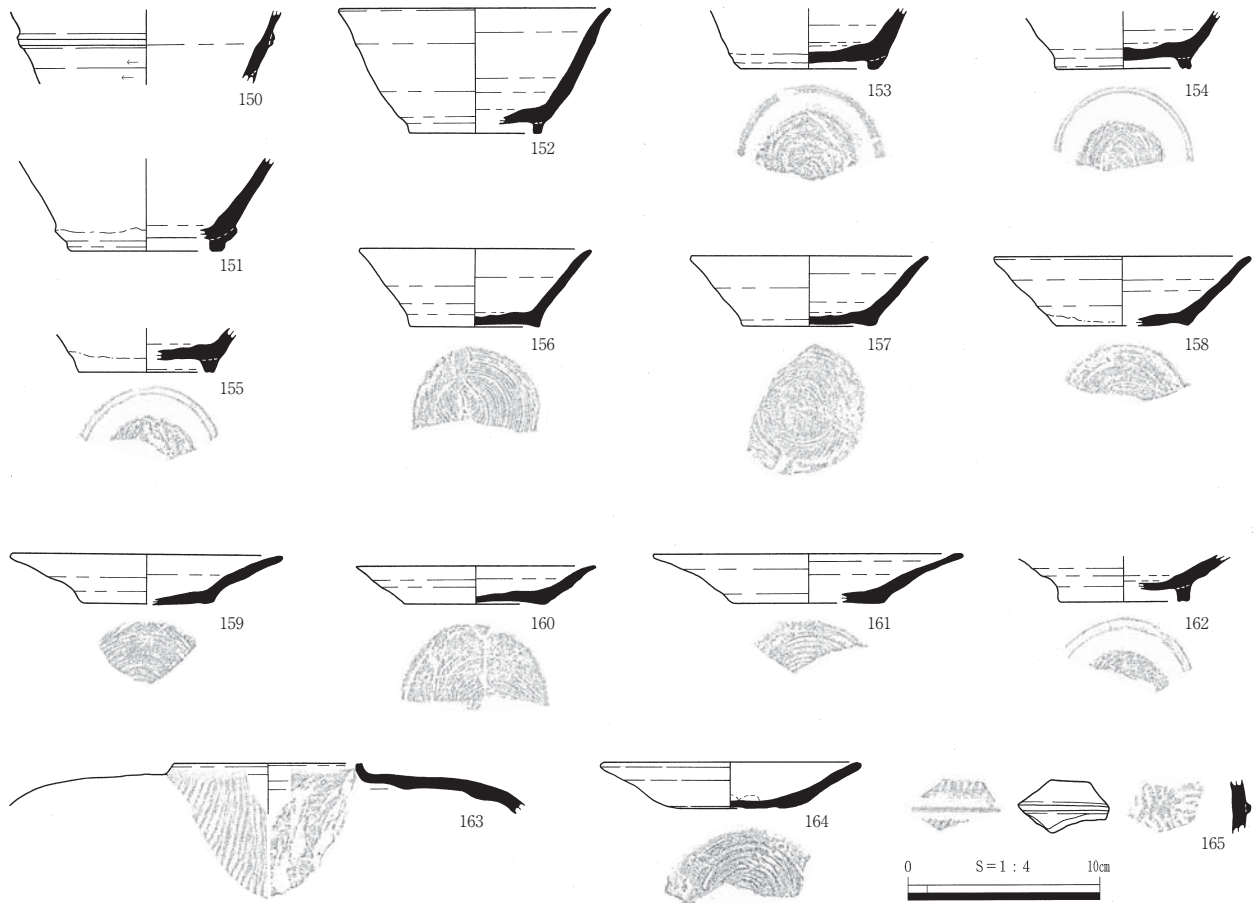


第90図 窯1新段階出土瓦類

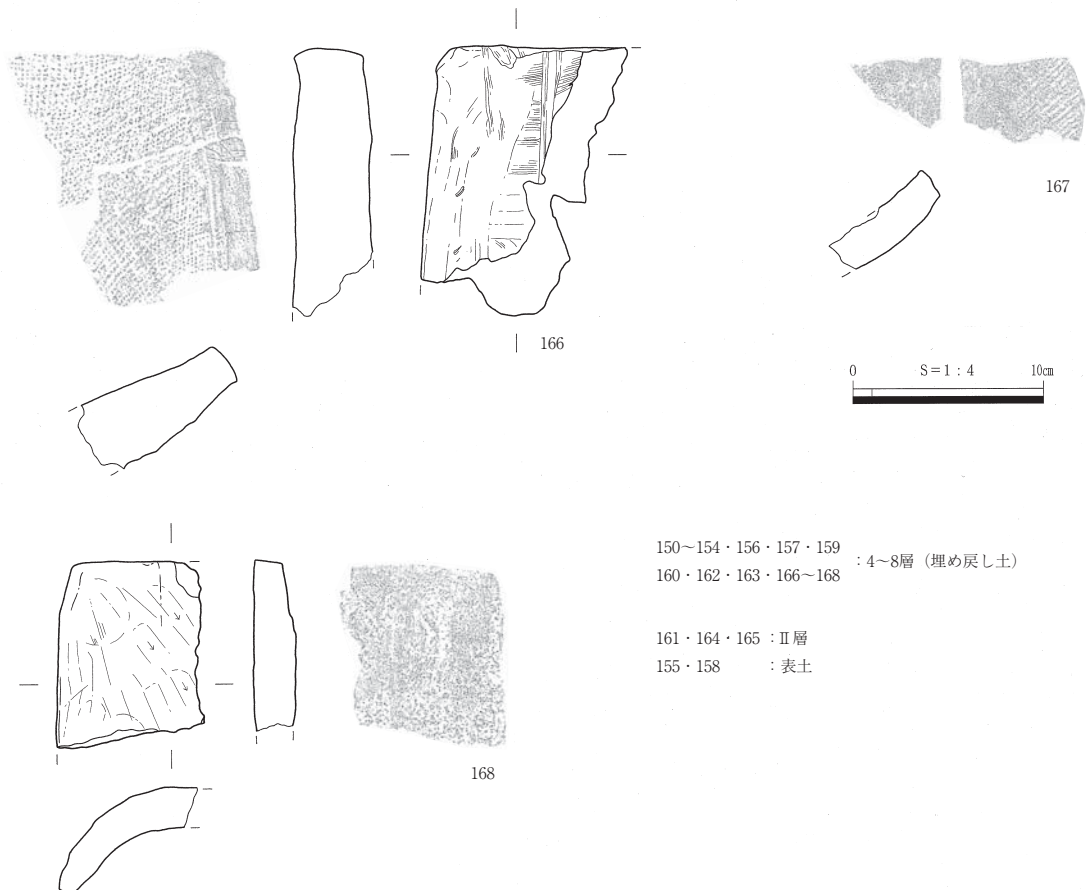
は明らかにしえない。内側内面に布目が回り込む部分がみられ、内側に型枠が置かれ成形されたことが窺える。148・149は平瓦で、148が床面直上、149が新段階埋土から出土している。

上層出土遺物(第91・92図、PL74・75・78-2・110-2)

窯1新段階の埋土堆積以降に堆積した上層から出土した遺物をまとめた。155・158が表土、161・164・165が窯1検出中のⅡ層、その他が窯1新段階廃絶後の埋戻し土である4～8層から出土している。埋戻し土出土遺物には、焚口周辺に掻き出されていた窯1の焼成品が多く含まれている可能性が高い。166・167が平瓦で、168は丸瓦である。167は凸面に平行タタキの痕跡を残す。



第91図 窯1上層出土須恵器



150~154・156・157・159 : 4~8層(埋め戻し土)
160・162・163・166~168

161・164・165 : II層
155・158 : 表土

第92図 窯1上層出土瓦